



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	文化的景観と場所論：「文化的景観」概念の歴史的市街地保全への適用に関する考察
Author(s)	山村，高淑；張，天新
Citation	京都嵯峨芸術大学紀要，29，21-35
Issue Date	2004-03-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39274
Type	journal article
File Information	YAMAMURA2004Lijiang_Cultural_Landscape.pdf



文化的景観と場所論

「文化的景観」概念の歴史的 市街地保全への適用に関する 考察

山村高淑

張天新[※]

1. はじめに

1-1. 研究の目的と背景

本稿の目的は、「文化的景観」(cultural landscape)を読み解く手法としての「場所論」の有用性を提示し、こうした手法が歴史的市街地を保全するうえで有効な手法となり得ることを示すことにある。

「文化的景観」とは、それまでの文化遺産がモニュメンタルな欧米型の記念的建造物に偏重しており、本来文化遺産が包含している多様な価値観が反映されていないという指摘に対して、「生きた文化」(living culture)、「伝統」(living tradition)など広く人間の諸活動に関わるあらゆる自然的・文化的要素を相対的に「景観」として捉え、そこに居住する人間の生活の証として位置付けようという考え方である(根木ほか1999: pp.54-58)。次章以降で詳しく述べるように、こうした概念はもともと UNESCO 世界遺産委員会において、1980年代以降に「田園景観」を拡大解釈して始まった議論である。その結果として、現在も主たる議論においては、庭園・公園、名勝・景勝地、農耕地と一体となった農村、劇的な自然環境に配された文化遺産など、自然的要素をまず景観(landscape)として捉えたうえで、その文化的価値を評価していくという手順を踏んでいる。そのため、人工的要素が強い都市景観(townscape)そのものが議論の中心となることはほとんど無い¹。

一方で、文化遺産としての歴史的市街地の保全をめぐる議論においては、伝統的建造物の物理的保存だけでは不十分であり、そこに継承されてきた社会的・文化的環境や、市街地を取り巻く周辺区域の環境を含め、適切に文化遺産の「全体性」を保全することが重要である、との指摘がなされるようになってきている²。例えば、本稿で事例として取り扱う中国雲南省麗江地区麗江ナシ(納西)族自治县大研鎮旧市街地(1997年に世界文化遺産として登録。以下「麗江旧市街地」と呼ぶ)³も、周辺の自然環境との文化的結びつきや、都市空間における場所のもつ社会的・文化的意味合いが極めて強い空間構成となっているにもかかわらず、保護政策は建築景観規制を中心に行われているのが現状であり、その他の文化的要素についての保護の枠組みが十分であるとは言いがたい⁴。そしてこのことは、世界文化遺産としての評価の対象があくまで伝統的住宅建築群であり、保全対象がこれに限定されていることに起因する⁵。裏を返せば、それ以外の要素が遺産として位置付けられていない、あるいは遺産との関連性が

※北京大学環境学院都市與区域規劃系教研室主任

明確に示されていないことを示している。

つまり、UNESCO における世界遺産の議論に限ってみても、歴史的市街地保全に関する議論と文化的景観保全に関する議論は全く別のカテゴリーに属するものとして切り離されて行われているのである。

1-2. 研究の方法と本稿の構成

本研究ではこうした背景に基づき、以下に示すような具体的な3つの手順により、「文化的景観」概念の歴史的市街地保全への適用を試みる。

第一に、これまでの UNESCO 世界遺産委員会を中心とした「文化的景観」に関する議論の流れを整理し、その定義、評価される文化的価値を明らかにする。具体的には、UNESCO 世界遺産委員会を中心とした国際機関による関連資料の収集を行い、文化的景観に関する議論の経緯を整理するとともに、これまでに登録された文化的景観の分類を行う。本稿ではこれが第2章に当たる。なお資料整理の便宜上、本稿で参照する国際機関における議論ならびに世界遺産の登録件数・登録事項は1999年末時点までに公表されているものに限るものとする。

第二に、「文化的景観」概念を歴史的市街地に適用するために、麗江旧市街地とその周辺区域（以下、この周辺区域を含めた範囲を便宜上「麗江」と呼ぶ）を対象に実地調査を行い、都市景観やその周辺自然景観を構成する要素の社会的・文化的意味合いを分析する。つまり、これら要素が「文化的景観」として如何に評価可能かの検討を行う。これが第3章である。本研究ではそのための手法として、建築学分野における、空間の「場所論」的分析手法を援用する。

なお「場所論」とは、空間を形態として理解するのではなく、空間はそこに発生する活動との関係において意味があるという考え方であり、これまで建築・都市・住まい・社会空間・風景などを対象にその研究が行われてきた⁶。これら研究では主として、空間の領域と方位、意味と価値、中心と境界、符号と象徴、感覚と認知などの事柄がその具体的な分析対象となっている。つまり、場所論では空間を「実存的空間」⁷として、日常生活経験との関係性において理解する点に特徴があるのである。したがって場所論を援用することで、単なる建築の物理的形態面からだけでは解釈できない、文化や生活様式を含めた「活きた」都市空間が説明できると考える。なお、この段階でのデータは、麗江の伝統文化に基づく空間理念に関する文献のレビュー、並びに現地確

認調査（2000年4月～6月・11月～1月、2001年9月、2002年3月、2003年3月）により収集した。

第三に、これらの結果を踏まえたうえで、麗江旧市街地に関して現在効力を有している現地政府による保護制度「麗江大研古城保護詳細計画」（以下、麗江保護計画）⁸の分析を行うことで、文化的景観保全の観点から、今後の麗江旧市街地保全のあり方に関する提案を行う。これが第4章である。

なお、このように文化的景観を読み解く手法として場所論を援用した研究は管見したところこれまで存在せず、またそうした視点を文化遺産管理に応用した研究も皆無である。このような点から、本研究は高い独自性を有していると言えよう。

1-3. 調査対象地区について

麗江ナシ族自治州は、中国西南部、雲南省西北部高原の、四方を山に囲まれた麗江盆地の中部（海拔2,416m）に位置し、その中心都市（県人民政府所在地）が麗江旧市街地を有する大研鎮である（図1）。大研鎮の轄区面積（新市街地を含めた全域面積）は56.1km²、総人口69,230人であり、うち世界遺産登録の対象である旧市街地（写真1）は面積約3.8km²、人口14,477人（4,156戸）を数える（2000年3月現在）⁹。

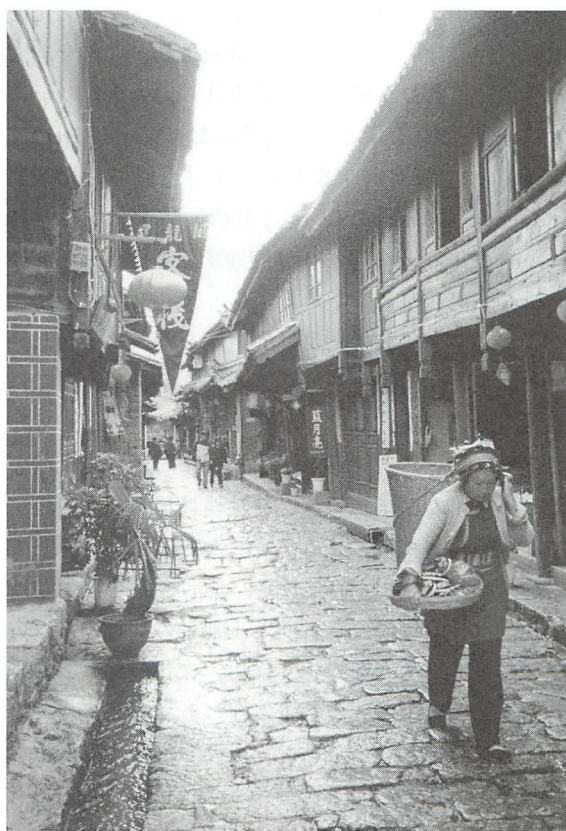


写真1 麗江旧市街地の町並み（現文巷）
（出所）筆者撮影（2001年9月）

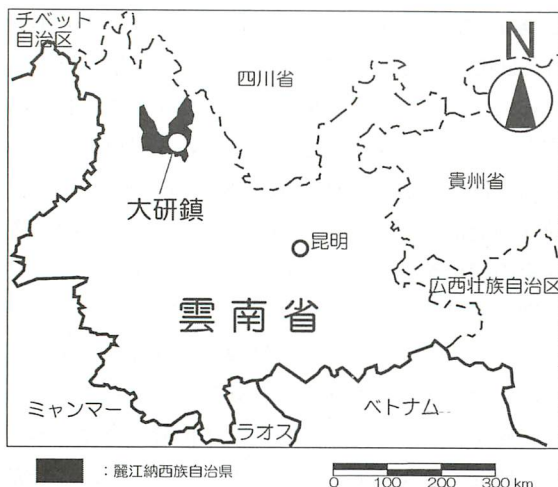


図1 麗江旧市街地（大研鎮）の位置

2. 文化的景観に関する議論とその考え方

2-1. UNESCOにおける「文化的景観」に関する議論の経緯

1981年以来、UNESCOの世界遺産委員会では、人間の営為と自然との結合の所産である景観を「田園景観」(rural landscape)と呼び、さらに1987年以降は概念を拡大して「文化的景観」(cultural landscape)と呼び替えて、文化と自然の両遺産を同一の制度のもとに論じられるよう、国際的な保護体系を構築する努力がなされてきた¹⁰。その結果、1992年の第16回世界遺産委員会において、「文化的景観」の概念の導入が正式に決定され、これを「文化遺産」に含むものとし、以下3つのカテゴリーに分類・定義されることが決定された(World Heritage Committee 1992)。すなわち、①「意匠された空間(designed landscape)」、②「有機的に進化する景観(evolved landscape)」、③「関連する景観(associative landscape)」の3つである。

こうして文化的景観は世界遺産を構成する新しいジャンルとして注目されるようになり、1994年には世界遺産委員会により、「遺産を“もの”として類型化するアプローチから、広範囲にわたる文化的表現の、複雑でダイナミックな性格に焦点をあてたアプローチへと移行させる必要」があること、そして「人間の諸活動や居住の形態、生活様式や技術革新などを総合的に含めた人間と土地との共存のあり方を示す事例や、人間の相互作用、文化の共存、精神的・創造的表現に関する事例なども考慮すべきである」ことが指摘された(World Heritage Committee 1994)¹¹。つまり、従来のように単なる「物件」(有形遺産、特に不動産)だけを遺産として考えるのではなく、「景観」を構成するそれぞれの要素を、有

形・無形、動産・不動産を通じた人間の営みの総合的なシステム(広義の「文化」)として再構成し、そのシステム自体に世界的な価値が存在する、と考えることが重要であると認識されはじめたのである。

2-2. 世界遺産における「文化的景観」のカテゴリー

このように UNESCO では、特に1990年代以降、文化遺産の分野における新しい枠組みづくりが大きく進展し、登録の対象とすべき文化的景観の範囲や種別も拡大しつつある。表1は1999年末までに文化的景観として世界文化遺産に登録された35の事例¹²について、「文化的景観のカテゴリー」と「評価された文化的価値」に注目して分類を行ったものである。

以下、表1に示した文化的景観の3つのカテゴリー、および近年議論されている第4のカテゴリーについて、その基本的考え方と「真正性」の判断¹³におけるポイント(すなわち重要視される文化的価値、保全におけるポイント)をまとめておく。

(1) 第1カテゴリー

「意匠された空間(designed landscape)」

第1カテゴリーは、庭園や公園など、人間の設計意図のもとに人工的に創作された景観であると定義され、建築・造園作品をデザイン面で評価するというスタンスが強い。そのため保全に当たっては、その意匠が十分保たれているかどうかが重要となる。

(2) 第2カテゴリー

「有機的に進化する景観(evolved landscape)」

第2カテゴリーは、人間の生活や土地利用と密接な関係を保ちつつ有機的に進化した景観を指す。これらはさらに、過去にその関係が終止している(i)「残存(化石)景観」と、現在も関係性を有する(ii)「継続する景観」の2つに細分類され、前者には遺跡とその周辺景観が、後者には農耕地など伝統的生業による景観が含まれる。特に後者については、自然地形と人間の営為との有機的相互交流(特に伝統的土地利用など)により景観が形成されている点が重要な文化的価値であるとされており、その保全に当たっては、遺産をめぐる社会的・文化的枠組みが現代社会の中で継続して保持されていることが重要となる。

表 1 文化的景観として登録された世界遺産の類型

カテゴリーと その定義（考え方）	指定景観	事例数	評価される景観の 文化的価値	具体的事例（国名/登録年）
第1 カテゴリー 「意匠された景観（designed landscape）」				
人間の意思によって設計され、意識的に作り出された景観	庭園・公園・墓園と建造物（群）	9	意匠（特に造園的設計意図・手法）	スコーグスキルコ・ゴードン森林墓園（スウェーデン/1994） シントラの文化的景観（ポルトガル/1995）
	運河（橋梁、水門など含む）	1	建築的構成と景観デザイン	カナル・ドゥ・ミディ（フランス/1996）
第2 カテゴリー 「有機的に進化する景観（evolved landscape）」				
(i) 残存（化石）景観：進化の過程が過去のある時期に突然あるいは時代を超えて終止している残存（化石）景観	古代・中世遺跡とその周辺景観	3	過去の文化・文明とその残存景観	ラパ・ヌイ国立公園（イースター島・チリ/1995） トロイ遺跡（トルコ/1998）
	産業遺産（鉄道）と沿線の自然地域	2	高度な産業技術	ダージリン・ヒマラヤ鉄道（インド/1999）
(ii) 継続する景観：伝統的な生活様式と密接に結びつき、現代社会の中で活発な社会的役割を保ち、進化の過程が今なお進行中である継続中の景観	農業景観、集落景観と農業景観	7	人間の営為と自然地形との有機的結合（土地利用のあり方） 伝統的な農法と密接に結びついて景観が保存され、今日なお耕作が継続されている点	フィリピン・コルディレラ地方の棚田（フィリピン/1995） アマルフィ海岸（イタリア/1997）
	集落景観と自然景観	2	集落景観と自然景観との調和	アッパー・スヴァネティ（グルジア/1996）
	牧畜利用されている自然景観と関連施設群	1	人間と自然との調和的關係	ホルトバジー国立公園（ハンガリー/1999）
	干拓地	1	その地域特有の土地利用のあり方	ベエムスターの干拓地（オランダ/1999）
	人工色の強い自然風景地	1	各種の考古学遺跡と一体となった景観	チレントとディアノ溪谷国立公園及びバエストゥムとエレア/ヴェリアの遺跡とパドゥラのカルトジオ修道院（イタリア/1998）
第3 カテゴリー 「関連する景観（associative landscape）」				
自然的要素の強力な宗教的、芸術的、または文化的な関連性によって定義される景観（文化的複合景観）	山岳地域、岩塊など	2	文化の精神的核心をなす場（先住民族の聖地としての文化的価値）	トンガリロ国立公園（ニュージーランド/1993） ウルル・カタジュータ国立公園（オーストラリア/1994）
	山岳、山林、寺社境内など	4	文化の精神的核心をなす場（宗教的霊場、道場、聖域としての文化的価値）	廬山国立公園（中国/1996） 古都奈良の文化財（日本/1998）
	海浜景観	1	現在も継続される先住民族の生業の場	ラッポニアン地区（スウェーデン/1996）
	山岳景観、田園景観	1	芸術活動の素材や舞台としての位置付け	ピレネー・ペルデュー山（フランス/スペイン/1997）

（注）データは1999年末時点でのもの。

（出所）定義はWorld Heritage Committee（1999）、第39項による。訳は本中（1999）、pp.251-255による。

（3）第3 カテゴリー

「関連する景観（associative landscape）」

第3 カテゴリーは、芸術・文化・宗教信仰などと深く関連する景観と定義され、人間の精神活動に直接関連する景観（特に場所）が登録の中心となっている。したがって遺産の持つ特徴・構成要素が、その依拠する伝統・文化・習慣・信仰などと十分に関

係しているかが評価のポイントとなる。しかしながらこうした極めて精神性の高い概念は、視覚的にも物理的にも外側に出てくることがほとんど無いため、その価値評価が極めて難しく、世界遺産登録上最も重要な指針である「顕著な普遍的価値を有する」かどうかという要件を裏付けることが非常に困難となっている（根木ほか1999：p.50）。こうした背景から、

「関連する景観」には、既に自然遺産として認定されたものの中で、文化的関連性のあるものが登録されているのが実態である。つまり、現状の枠組みでは、優れた自然景観を有さない限り、精神性まで評価されることは難しいのである。

(4) 第4 カテゴリー

「記念物などの環境としての景観 (setting)」

現在上記3つのカテゴリー以外に、第4 カテゴリーとして「記念物などの環境としての景観 (setting)」を位置付けようとする議論もある¹⁴。これは遺産そのものの周辺に展開し、それらと一体となって価値を形成するもので、緩衝地帯としての性格も併せ持つものである。なお、ここでいう「環境としての景観」とは遺産周辺に広がる景観を指しているが、第2 カテゴリー(ii)「継続する景観」のように周辺景観そのものが遺産の核心として高い価値を有し、文化遺産としての本質をなしているという考え方はなく、その景観自体に普遍的価値や特別の価値が無くても、特定の遺産の周辺に展開し遺産本体と一体的な価値を構成する景観を積極的に評価していこうとする考え方である。

3. 場所論から見た麗江の空間構造と空間の意味

この章では、場所論の考え方を援用し、具体的に以下の方法により、麗江の空間構造および空間の意味を明らかにすることを試みる。まず麗江における都市建設の歴史と建設上の空間理念を歴史資料から明らかにする (第1節)。続いて麗江旧市街地とその周辺区域を、精神的空間領域と日常生活空間領域の二つに分け、これら領域の関係性を明らかにする (第2節)。その上で、日常生活空間領域にある場所を商業的・政治的・日常生活的、という三種類の場所に分類し、それぞれの配置の仕方と空間利用ルールについて整理を行うとともに (第3節)、街路や水路の持つ「通路」としての空間パターンを明らかにする (第4節)。そして「水」という基本的空間要素の可変性と連続性を分析し、都市空間に与えている意味を明確にする (第5節)。

3-1. 麗江旧市街地における都市建設の歴史と建設上の空間理念

麗江旧市街地は、ナシ族によって宋代末にその建設が始まって以来、現在に至るまでおよそ800年の間、ナシ族の政治・経済・文化の中心として発展してきた町である。なお、ナシ族は独自の言語・文字・宗教を有する中国の少数民族で、古代羌族が南下して雲南省西北高原を中心とした地域に定住した民族であると言われている (郭ほか編1999: pp.419-421)¹⁵。

麗江旧市街地のある場所は、早くも秦・漢時代には既に「南方シルクロード」¹⁶ および「茶馬古道」¹⁷ といった交易路上の要衝であり、特に雲南とチベットを結ぶ貿易では重要な地理的位置を占めていた。こうした交易は、漢族、白族、チベット族、ナシ族の交流を促し、麗江旧市街地において商業や文化の繁栄をもたらした。またこのような他民族との交流を通して、ナシ族の先祖は広く外来文化を吸収するとともに、自らに特有な文化を生んできた¹⁸。例えば、伝統的住宅建築、トンバ(東巴)文化¹⁹、音楽、服飾、祭典、手工業、民間芸術、習慣・道徳、土司(中央より世襲の官職を与えられた少数民族の首長)による政治的統治方式などはその代表的なものである。

このように、麗江旧市街地の持つ歴史的・文化的背景は漢族の都市のそれとは大いに異なっている。したがって空間的にも他の漢族の都市に見られない顕著な特徴がある。すなわち麗江旧市街地においては、一般的な中国の歴史都市の空間構造を規定した「礼制」²⁰に基づく空間理念や、軸線による空間の対称配置、城壁の存在による閉鎖性、南を良い方向とする、などといった空間理念は存在しないか極めて希薄である。その代わりに、自然的要素の利用といった実利的な空間利用法や、東を良い方向とするといったようなナシ族独自の方位概念 (表2)に基づいて都市が形成されてきたと考えられている (蔣1996: pp.16-29)。その結果として、麗江旧市街地は、開放性が高く (中国の歴史的都市の中で、麗江旧市街地は城壁が建設されなかった稀有な存在である)、不整形な都市空間形態となっている (写真2)。

このような都市配置・都市空間構造は、都市工学

表2 麗江ナシ族の方位概念

	東	西	中 (原点)	南	北
空間の意味	日の出、光、生命	日没、死	自己	「水尾 (川下)」、 子孫、開拓	「水頭 (川上)」 祖先、回帰

(出所) 蔣 (1996), pp.16-29をもとに筆者作成。

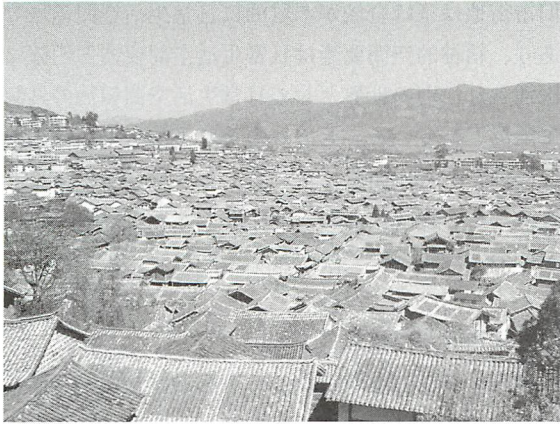


写真2 麗江旧市街地遠景

(注) 中国の他の歴史都市とは異なり、城壁を有さず、南北軸による空間の対称配置も見られない。

(出所) 筆者撮影 (2003年 3月)

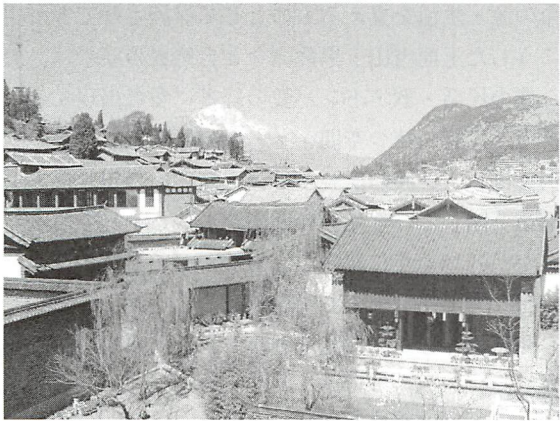


写真3 麗江旧市街地の都市配置

(注) 向かって右端が象山、左端の小さい部分が獅子山。中央奥にそびえるのが玉龍雪山 (後述)

(出所) 筆者撮影 (2003年 3月)



写真4 玉龍橋 (玉河分水)

(出所) 楊 (2000), p.19

的に見れば、自然の地形や水資源を建設上巧みに利用している点に大きな特徴がある。すなわち麗江旧市街地は、冬の北西風を防ぎ、夏の風通しをよくするために、北は象山および金虹山、西は獅子山に依り、東南面には平野が開ける、といった場所に配置・建設されている (写真3)。また旧市街地の北に位

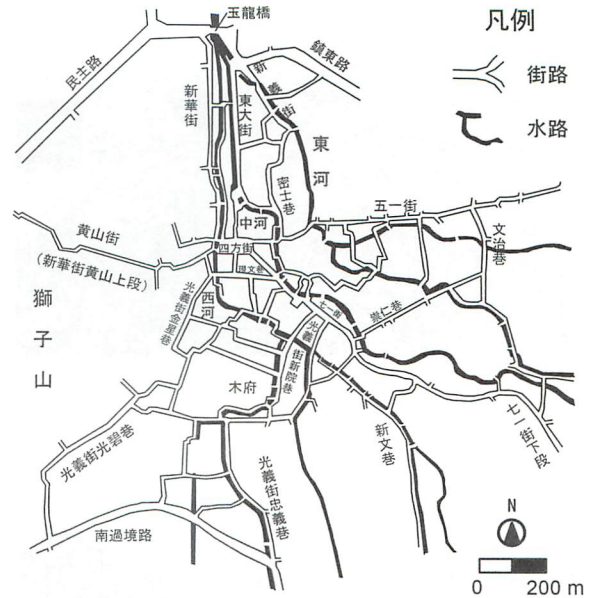


図2 麗江旧市街地概略図

(出処) 徐 (2000), p.14をもとに筆者作成。

置する象山の麓に湧き出る玉泉水 (玉河) を巧みに利用し、これを旧市街地に引き入れることで、古くから上水道網が構築されている。この玉泉水は、旧市街地の北の入り口である玉龍橋の下で3つの支流に分かれ (玉河分水、分水処などと呼ばれる)、西河・中河・東河として旧市街地内を東南方向へ流れている (図2、写真4)。これら3本の支流はさらに無数の細い水路となって旧市街地を潤し、現在でも生活用水として利用されている (周ほか1999: p. 214)。

麗江旧市街地の中心には「四方街」と呼ばれる広場が位置する。この広場は、古くは他の都市と麗江を結ぶ街道が交わる交易広場であり (写真5)、現在は観光客向けの露店が軒を並べる観光スポットとなっている (写真6)。旧市街地の基本構造は、この四方街を中心に4本の主幹街道、すなわち、新華街、五一街、七一街、黄山街 (新華街黄山上段) が放射状に伸び、そこからさらに細かな路地が広がったものである。こうした路地と水路が密接に結びつきながら蜘蛛の巣のように広がり、300余もの橋が架かっている様から、麗江旧市街地は「高原山水都市」とも呼ばれている (写真7)。

歴史的にも、麗江旧市街地は四方街を中心として徐々に形成されてきた都市である。4本の主幹街道と3本の水路に沿って外側に自由に拡大発展できる構造を基礎として、多くの細街路や大小の路地が形成され、それぞれの場所の機能も分化してきたと言われる (雲南省城郷規劃設計研究院・麗江県城建局 1988: pp.31-32)。

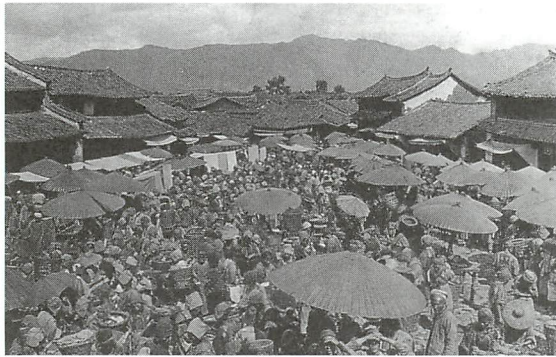


写真5 1930年代の四方街
(出所) 於 (1998), p.14

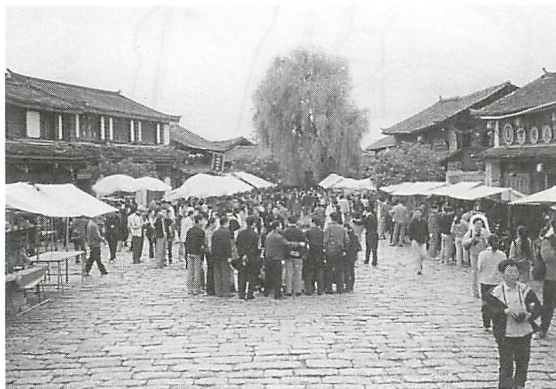


写真6 2001年現在の四方街
(出所) 筆者撮影 (2001年9月)



写真7 麗江旧市街地の路地と水路 (中河)
(出所) 筆者撮影 (2000年11月)

3-2. 精神的空間領域と日常生活空間領域

一般に、都市の空間領域は精神的空間領域 (非日常の空間)、日常生活空間領域、及びその間にある中間領域 (つなぎ空間) に分けることができるとされている (日本建築学会1996: pp.188-190,226)。これにしたがって麗江旧市街地の空間構造を見てみると、旧市街地内には寺廟など精神的場所がほとんどなく、ほぼ全域が日常的な場所として存在していることがわかる。このことは、寺廟などの精神的場所が日常生活空間領域の中に混在している一般的な中国の都市空間構造とは大きく異なる。すなわち麗江

旧市街地はほぼ全域が本質的に日常生活空間領域であり、精神的空間要素は日常生活空間要素と明確に区別され、別の世界として日常生活空間領域の外側に配置されている。そのためそれぞれの空間領域の純粋性や特質が顕著に現れることになるのである。このことを模式化したのが図3である。以下、それぞれの領域について説明を加えておく。

(1) 精神的空間領域

麗江ナシ族固有の宗教は、自然崇拝を中心とする「トンバ教 (東巴教)」であるが、この宗教は固定化された礼拝場所としての寺廟を持たない。逆に、玉龍雪山 (写真8)、黒龍潭 (池・湖・湧水) など自然の中に位置する場所が聖地とされ、信仰の対象・生命の源・生活を支えるものとして保護されてきた。こうした玉龍雪山・黒龍潭など自然界の要素は、ナシ族の民話・歌・トンバ教の経書に多数出現することで、民族の持つ空間イメージの原型となっている。例えば、ナシ族の伝説では、玉龍雪山の辺りに「玉龍第三国」という死後の楽園があるとされているのだが、叶わぬ愛に悲嘆した男女がそこに至ることを目指して玉龍雪山で心中を遂げるという行為が1950～60年代くらいまで見られたと言う (郭編1999: pp.168-178)。

このような背景があり、現在でも空間的に旧市街地の周辺を取り囲む自然豊かな領域は、ナシ族住民の意識上、旧市街地の中の日常世界とは区別された精神的意味を有しているのである。

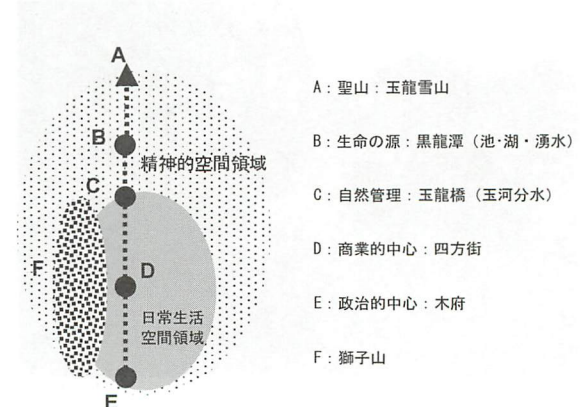


図3 麗江の空間領域と場所



写真8 玉龍雪山
(出所) 筆者撮影 (2003年3月)

(2) 日常生活空間領域

一方、三坊一照壁（母屋の両側に直角に2棟を配して“コ”の字型とし、母屋の対面に“照壁”（塀）を設けた三合院形式）を特徴とした住宅や、四方街を中心とした商業区域、四方街から放射状に延びる街路、玉河が旧市街地に入ってから分流してできた西河・中河・東河という水路システム、それに橋や牌坊（アーチ様の建造物）などの人工的空間装置は日常生活空間領域に属する。この領域には生活と関わる場所が複数存在し、通路としての街路と水路によってつながっている（前掲図2）。

(3) 中間領域（つなぎ空間）

精神的空間領域と日常生活空間領域との間には中間領域（つなぎ空間）がある。獅子山、玉龍橋の玉河分水はその中間領域に属し、精神的意味と日常的意味の双方を持ち、両義性を示す（図4）。具体的には、前述のとおり、玉龍橋において、精神的空間領域である黒龍潭から流れてきた玉河が三つの流れへと分割され、日常生活空間領域であるところの旧市街地全体へ生活用水として送られる仕組みになっている。こうした意味でも、玉龍橋（玉河分水）は精神的空間要素が日常生活空間要素へ転換する境界的場所と考えられる。

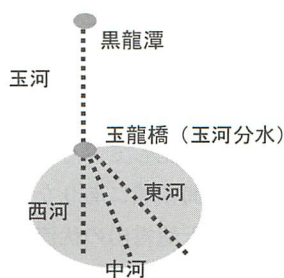


図4 玉河の分水利用

また獅子山に注目してみると、獅子山は旧市街地の背景となり、ナシ族の方位概念にしたがって旧市街地を日の出（光、生命）の方角である東に向かわせる働きがある。前掲図3が示すように、木府²¹（政治的中心。写真9）・四方街（商業的中心）・玉龍橋（つなぎ空間）という、旧市街地における3つの重要な場所が、全て獅子山の東麓に、南北ほぼ一直線上に位置していることから、獅子山の空間構造上の重要性が伺える。

さらに、この南北のラインは旧市街地の北側に位置する黒龍潭へと、玉河という水を通してつながっており、日常生活空間領域から精神的空間領域へと結ばれている。そしてその北の延長線上には、遠く視覚的に聖山（玉龍雪山）がつながる（写真10）。こうした構造によって、麗江では漢族の歴史都市のように軸線による空間の対象配置という手法を用いなくても、異なる領域・場所が、物理的・精神的・象徴的なラインによって結び付いているのである。



写真9 木府（1998年に復元された。現在、麗江古城博物院として公開。）
(出所) 筆者撮影 (2003年3月)

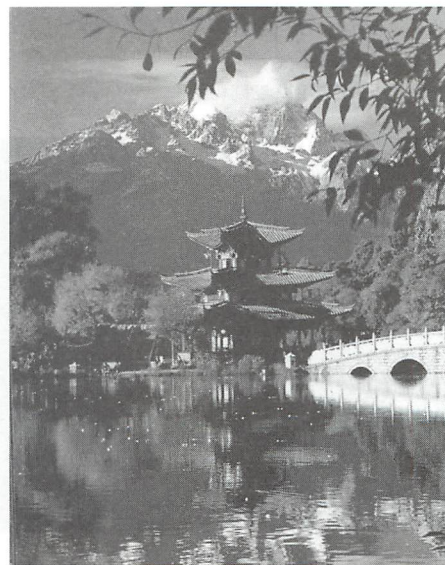


写真10 黒龍潭から北へ玉龍雪山を望む
(出所) 楊 (2000), p.18

3-3. 日常生活空間と「場所」

麗江の日常生活空間領域における「場所」は、空間利用形態によって商業的場所、政治的場所、日常生活場所に分けることができる。以下、それぞれの場所の持つ特徴についてまとめておく。

(1) 商業的場所

前述のとおり、四方街はかつて、他の都市と麗江とを結ぶ街道が集合する交易広場であり、市街地空間の中心的な場所であった。なお、旧市街地中心部に交易広場としての四方街が位置する空間構造は、白沙²²・龍泉²³といった、より古い時代に形成されたナシ族の伝統的集落でも同様に認められることから、ナシ族集住地の中心的場所の空間「原型」と言っている。

かつては四方街において、週に1回西河の流れを止め、溢れた水で農産物などの交易で汚れた四方街を洗い流すという利用ルールが存在した（図5、写真11）。また西河をわたる橋には「売鴨蛋橋（卵を売る橋）」、「売鶏豌豆橋（豆を売る橋）」などの呼称が現在も残っており、場所が商業活動によって認識されていたことが伺える。このように、空間にはその意味と利用ルールが存在し、そのことが空間認識上必要な要素となって、空間が場所化されてきたことがわかる。

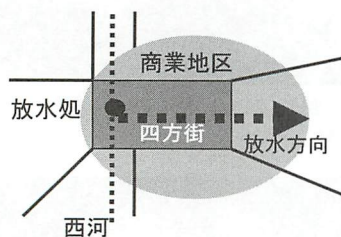


図5 四方街の空間利用



写真11 西河を堰き止め四方街を洗い流す作業
（かつての様子を行政が再現したもの。五一街にて。）
（出所）筆者撮影（2000年5月）

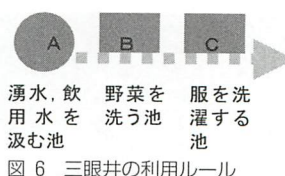


図6 三眼井の利用ルール

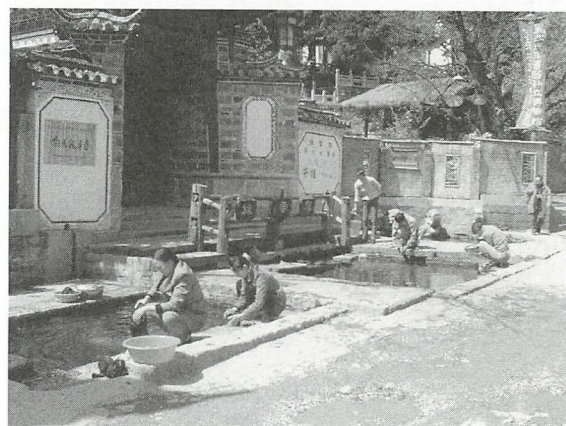


写真12 三眼井（白馬龍潭）
（出所）筆者撮影（2003年3月）

(2) 政治的場所

中国における他の歴史都市と違って、麗江では市街地空間の中心は四方街という商業的場所としての広場によって占められており、木府を代表とする政治的場所は旧市街地の南部、西河の下流部分（ナシ族の方位概念では「水尾」、すなわち川下方向）にあたり、市街地空間の中心的な場所とはなっていない（前掲図2）。

(3) 日常生活場所

麗江旧市街地において住民の日常生活と密接に関連している空間装置が井戸であり、その多くは「三眼井」という様式を採用している。これは水路を三段階の池状に区切り、(A)最上流部を飲料水の採取場、(B)中部を野菜の洗い場、(C)最下流部を衣類の洗い場として分割利用したものである。飲料水の汚濁を防ぐという智慧であり、現在でも住民はこのルールに則って水を利用している（図6、写真12）。ただし現在では水道水の普及により飲料水として用いられることは少なくなった）。こうした空間利用ルールの存在は住民どうしの協力を必要とするため、三眼井の存在が、コミュニティの形成に大きな役割を担っているという点も、日常生活場所の持つ重要な社会的意味として特記しておく必要がある。また井戸は日常生活空間領域にありながらも、精神的空間領域に位置する玉龍雪山の伏流水が湧出したものや、同じく精神的空間領域にある黒龍潭の湧水が水路によって運ばれてきたものを採取するという意

味で、神聖さを有する場所でもある。こうした意味で、井戸は日常生活空間要素としても精神的空間要素としても位置づけることが可能であり、両義性を有する空間要素であると言える。

3-4. 通路空間の機能

水路と街路は、麗江の日常生活場所に意味を与え、空間的につなぐ「通路」としての機能を持っている。以下、その特徴についてまとめておく。

(1) 河川（水路）の機能と意味

玉河は玉龍橋のところで、精神的空間領域から日常生活空間領域に入るが（前掲図3）、その後、日常生活空間領域において河川の利用は機能化・生活化する。その利用方式は、放水、洗濯、橋をかける、建物を河川（水路）に沿って建てる、道路を河川（水路）と平行して作るなど様々な形態が挙げられよう。なお、三つの河川（西河・中河・東河）のうち中河は自然の河で、他の二つは人工河川である。三つの河川は全く同じ機能、意味を有しているわけではなく、それぞれの位置、つながる場所の重要性、利用ルールが異なる。すなわち、西河は獅子山の麓を流れ、四方街や木府など、商業的・政治的に中心となる場所を結んでいるため、最も利用度が高く、利用方式の定式化度合いも高い。一方、中河はもとも存在した河川であり、最も早い時期から居住地内を貫流していたと考えられる。この中河に沿う場所は、主として商業や居住などの用途で用いられており、井戸も多数あり、最も利用方式が多様で、生活化している河川である。東河は旧市街地内で標高の低い区域、中心部から離れた住宅地を結んでおり、最も利用方式の定式化度合いが低く、一般的な水路として利用されている。

(2) 街路空間システム

旧市街地の街路空間は迷路状になっているが、分析すると主に2つのシステムからなることがわかる。すなわち、玉龍橋（分水処）のところから3つの河川に沿って町に入る街路空間（図7-A）と、四方街から放射していく街路空間（図7-B）であり、いずれも放射状の空間パターンを採用している。その2つの空間が重なった結果、現在の旧市街地の街路空間システム（図7-C）となっていることがわかる。

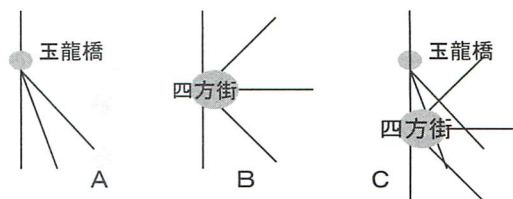


図7 旧市街地全体の街路空間構成パターン

(3) 街路と水路の組み合わせパターン

街路空間と水路空間による空間演出は、麗江旧市街地の空間的特徴となっている。街路と水路という2つの通路空間は、図8に示すようないくつかの空間的な組み合わせのパターンにまとめることができ、こうしたパターンが様々な配置形態をとることによって、変化に富む通路空間が構成されているのである（図8）。

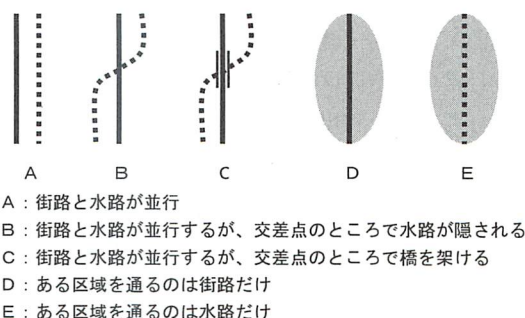


図8 街路と水路との組み合わせによる空間パターン

3-5. 水の変形、利用ルールから見た空間の意味

水は2つの空間領域の両者において、様々な形をとりながら存在している（図9）。すなわち、精神的空間領域では雪（玉龍雪山）、そして湧水、潭（池・湖・湧水）という形を取り、日常生活空間領域では水路として演出されている。そしてその中間に、精神性と日常性の両義性を有する場所としての分水処および井戸が存在しているのである。このように見れば、隣接する精神的空間領域と日常生活空間領域という二つの領域は、主に水のつながりによって一体化されているといえることができる。

一方、水の位置付けと具体的な使われ方に着目すれば、精神的空間領域では聖的なものと位置付けられ、祈られ、そして保護されているが、日常生活空間領域に入ると、日常的なものとして機能的に使われるようになることがわかる。このように、空間の意味が転換すれば、水もその形態を変え、利用ルールも転換するのである。

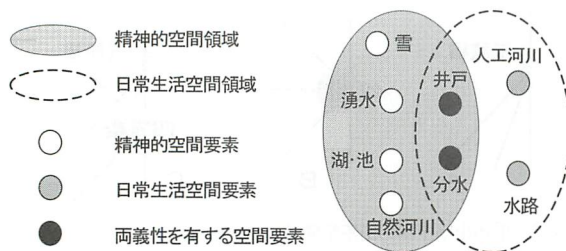


図9 領域の変化と空間要素「水」の変形

3-6. 小括

以上、麗江の都市空間構造と空間の意味について分析を行ってきたが、その結果をまとめると大きく以下の5点が指摘できる。

- 1) 麗江旧市街地とそれを取り巻く空間は、精神的空間領域と日常生活空間領域とに分けられ、それぞれ空間的・意味的に両立していると同時に、文化的・意味的・機能的につながっている。
- 2) 日常生活空間は町の歴史、民族の集合的記憶に裏打ちされた利用ルールによって定式化され、意味を与えられ、場所化されている。
- 3) 空間通路、特に水路は、精神的空間領域と日常生活空間領域の双方に存在し、二つの領域をつなぐことによって多義性、空間の意味の転換機能を有し、空間構造や意味を結ぶ糸となっている。
- 4) 空間領域や場所、通路などの要素は相互に結びつき且つ不可分である。こうした物理的環境は、麗江の社会的・文化的環境（日常生活・伝統文化・風俗・心理など）が空間に意味を与え形成されてきた場所なのである。したがって旧市街地空間の意味を生かした保全を可能とするためには、住民構成・土地利用・建物類型・空間タイプも含めてこれを考慮する必要がある。
- 5) 旧市街地に存在する日常生活空間要素は精神的領域にある自然的要素と一体化した空間システムを構築していると言うことができる。このことは「文化的景

観」として理解することが可能である。

このように、麗江旧市街地ならびにその周辺区域の空間構造は、利用ルールや生活様式、コミュニティの形成など、人々の活動と深い関係性を有している。そして、こうした空間と人々の活動との関係性、すなわち「場所性」が存在することによって、麗江旧市街地は「活きた」歴史的市街地たり得ているのである。

4. 文化的景観としての麗江の評価と保全の問題点

本章では、以上の議論を踏まえ、麗江旧市街地とその周辺区域について、「文化的景観」の考え方を適用した評価を試み、現行の麗江旧市街地保護制度が内包する問題は何なのかを検討する。その際、前章で示したように、旧市街地は日常生活空間領域、その周辺区域は精神的空間領域と位置付ける空間の見方を適用する。

なお、麗江旧市街地は1997年に世界文化遺産として登録されているが、その際、登録報告書に記載された麗江旧市街地の評価要素を表3にまとめておく。この表からもわかるように、推薦書作成時および登録時の遺産としての評価の中心は、あくまで伝統的住宅建築群にあり、周辺景観との関連性や場所の持つ精神性などに対する評価は十分であるとは言えない。

表3 麗江の世界文化遺産への登録根拠

■登録物件名	
The Old Town of Lijiang (中国語表記は「麗江古城」)	
■適用された登録基準	
(ii)ある時期、あるいは世界のある文化圏において、建築、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に大きな影響を与えた人間的価値の交流を示していること。	
(iv)人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体、あるいは景観に関するすぐれた見本であること。	
(v)ある文化（または複数の文化）を代表するような伝統的集落または土地利用の顕著な例の、特に回復困難な変化に対して無防備な状態にある場合。	
■登録根拠	
①地理的・歴史的背景	・中国西南部の商業的・戦略的に重要な場所に位置し、山岳地形に調和・適応してきた点。
②歴史的都市景観	・高い質と真正性を有する歴史的都市景観を現在も保持している点。
③建築様式	・都市景観を構成する建築様式が、何世紀もの間に複数の文化に由来する要素が融合したことを顕著に示している点。
④上水道網	・複雑で創意のある歴史的な上水道網が現存し、現在も機能し続けている点。

(出所) 麗江の登録根拠についてはWorld Heritage Committee (1997a), p.47, World Heritage Committee (1997b) を、登録基準の内容についてはWorld Heritage Committee (1999) を参考に筆者作成（筆者訳）。

い。そのため、文化的景観としての登録はなされておらず、また現在に至るまで再評価もなされていない。

(1) 旧市街地周辺区域

表4は麗江保護計画における旧市街地周辺区域に該当する部分の位置付けと保護項目をまとめたものである。前章で見たとおり、旧市街地周辺区域は精神的空間領域に当たり、かつては旧市街地で生活する人々を支える自然と神の位置する領域として意味があった。しかし現在は視覚的な美観保護の位置付けしかなく、農地や自然景観についてもその精神的意味は評価されていない。また保護項目に、聖地である玉龍雪山についての記載は無い。

表4 旧市街地周辺区域に関する保護項目

■環境協調区の設定
・旧市街地の外周部分 50-100mを環境協調区として指定
・建物の階高・高さ、色彩、屋根形式の制限
・新設橋梁の材質制限
・緑化推進
■外周地区の保護
・環境協調区の外周部分（具体的指定面積無し）
・高層建築の禁止
・旧市街地東南部分（主に農地）を都市計画区域として認めない
・現在の農地・緑地の維持

（出所）雲南省城郷規劃設計研究院（1997）より筆者作成

一方、UNESCO 世界遺産委員会の文化的景観をめぐる議論における、こうした精神的空間領域の取り扱いを見てみると（第2章参照）、第3カテゴリーの「関連する景観」において、先住民族の文化の精神的核をなす場としての聖地が登録されている。麗江における玉龍雪山を中心とする精神的空間領域は世界遺産の登録対象とはなっていないが、ナシ族の聖地としてトンパ文化の精神的な中核をなす場であり、これらと同様の評価が可能であると考えられる。ただし、聖地としてこれまでに登録されている文化的景観の例は、聖地そのもの（山岳・岩塊等）や聖域そのもの（寺社境内等）であり、住民の居住地との関連性について積極的な評価を行う枠組は存在しない。前章で見たように麗江の精神的空間領域は、日常生活空間領域との密接な関係性に特徴があり、こうした一体性の面から精神的空間領域を評価する考え方が必要になる。

また精神的空間領域と日常生活空間領域との関係性という点では、表4の具体的保護項目に示すとおり、精神的空間領域の一部が環境協調区や外周地区という名称で、旧市街地保護のための緩衝地帯とし

て、それ自体が保護の対象に位置づけられている。上述したような精神的空間領域としての意味から見れば、こうした旧市街地周辺区域は、近年欧州を中心に議論が行われている第4カテゴリーの文化的景観「遺産周辺に展開する緩衝地帯」（第2章第2節参照）としてその「遺産部分と一体となった価値」を評価されるべきものである。しかしながら麗江旧市街地周辺区域に関する保護項目（表4）からは、旧市街地と一体となった価値に関する積極的な評価や保全方針を読み取ることはできない。また現実問題として、表4の保護項目自体も効果があがっているとは言い難く、特に旧市街地の西側から北側にかけては新市街地建設区域として、歴史的空間とは全く切り離された市街地空間が急速に拡大を続けているのが現状である（山村2000b：pp.30-33、写真13）。



写真13 新市街地（旧市街地隣接部分）
（出所）筆者撮影（2000年11月）

こうしたことから考えると、文化的景観としてみた場合、以下の2つの観点から第4カテゴリーにおける緩衝地帯の考え方を拡大し、より積極的な意味を持つ緩衝地帯（以下仮に「積極的緩衝地帯」と呼ぶ）として、麗江保護計画における再定義を行うことが有効であると思われる。

第1に、前章で示した聖地（玉龍雪山）一命の源（黒龍潭）一自然管理（玉龍橋・玉河分水）といったような精神的空間領域における諸要素の意味的・空間的関係性をシステム（精神的空間システム）として再構築し、それらを物理的経路（例えば歩行者空間）や視覚的経路（例えばビスタ）などとして緩衝地帯の機能の中に反映する。

第2に玉龍橋（玉河分水）や井戸など精神的空間領域と日常生活空間領域を接続する機能（つなぎ空間）を再評価し、緩衝地帯における精神的空間システムが旧市街地と意味的連続性を有することを明確にする。これにより緩衝地帯は旧市街地と一体化して価値を構成することが可能となる。

(2) 旧市街地空間

麗江旧市街地は日常生活空間領域に当たる。世界文化遺産としての麗江の核心をなすのは、まさにこの領域に存在する伝統的住宅建築群であるのだが、その文化的価値を考えた場合、建築様式のみならず、その場所の使われ方、つまり「空間利用ルール」が重要な要素となる。こうした「空間利用ルール」は、UNESCO 世界遺産委員会の文化的景観カテゴリーにおける第2カテゴリーの(ii)「継続する景観」に含まれる概念に非常に近い。つまり「継続する景観」で評価される文化的価値は、伝統的な生活様式と結びつき、現在も役割を持ち続けていることにあり、その評価基準の考え方のみにしたがえば、例えば麗江における井戸や水路網等も文化的景観としての評価の対象となり得よう。

しかしながら、このカテゴリーにこれまで登録された文化的景観を具体的に見てみると、農業景観、牧畜利用されている自然景観、干拓地といったように、土地利用のあり方そのものや、周辺の自然景観と人工物との調和のあり方など、あくまでも自然的要素が基軸に据えられて登録が行われており、人工的要素が強い都市景観そのものが登録されている事例は今のところ存在しない。これは、もともと文化的景観の概念が「田園景観」を拡大解釈して始まった議論であったことに起因しているものと考えられる。すなわち、文化的景観をめぐる議論の歴史自体が、まず自然的要素を「景観」として捉えたうえで、そこに文化的価値を付与し、人間の生活の証として説明しようとする試みであったためであろう。そのため同じ景観でも、人工的要素が強い都市景観そのものが議論の中心となることがほとんど無いのだと考えられる。

このような経緯があるため、目下、同様に人間の生活の証として位置づけられる景観であっても、人工的要素が強い、都市・集落内における日常生活空間領域そのものを、文化的景観として評価する枠組みは存在していない。つまり、日常生活空間領域における「空間利用ルール」の文化的景観(すなわち文化遺産)としての「普遍的価値」や「真正性」を評価する理論的枠組みや具体的手法が確立されていない。(なお、こうした手法が確立されていない以上、世界遺産登録上の要件である、「顕著な普遍的価値」や「真正性」を有することは立証できず、文化的景観として世界遺産にも登録できないことになる。)²⁴

一方、麗江保護計画に目を転じて、状況は同様

であり、日常生活空間領域、すなわち旧市街地に関する保護項目は建築景観ガイドラインにより構成されており、空間の機能や意味については全く規定がない²⁵。

以上の議論を踏まえれば、人々の活動・住民構成・土地利用、さらには他の場所との関係性など「空間利用ルール」を規定する要素全体を、ひとつの空間システムとして認識・評価・保全することが、こうした保護制度上の問題点を改善するうえで非常に重要になってくると言えよう。それは「日常生活空間システム」保全のための新たな枠組みとも呼ぶべきものである。

5. まとめ

現在の麗江のように、建築外観の保護・整備を中心とした歴史的市街地保全の枠組みでは、その他の要素と切り離された、物理的な建造物群が保存されるのみで、生きた文化の存続は難しい。したがって精神性や生活をも含めた、都市空間構造の全体性を保全する必要がある。そのために、ここではまとめに代えて、文化的景観の意味を拡大・補正した麗江旧市街地保全のための新たな概念を以下のように提案したい。

①「積極的緩衝地帯」の設定：第4カテゴリーにおける緩衝地帯の考え方に、a)精神的空間システムを経路などとして具体的に緩衝地帯の機能へ反映、b)つなぎ空間による精神的空間システムの旧市街地との意味的連続性の明確化、という考え方を導入することでより積極的な意味を有する緩衝地帯として、旧市街地周辺区域を再定義する。

②「空間利用ルール」保全の枠組構築：「空間利用ルール」を規定する要素(活動・住民構成・土地利用等)全体を「日常生活空間システム」として認識・評価する。それによって「空間利用ルール」を保全するための新たな枠組の構築を行う。

今後は、本研究で行ったような都市空間の文化的景観としての検証作業を、麗江だけでなく他の歴史都市の事例についても行うことによって、より議論に普遍性を持たせていく必要がある。そのような作業を通して、「積極的緩衝地帯」や「日常生活空間システム」等、本研究で提案した概念を発展させるとともに、これらを UNESCO における既存の文化的景観の考え方と一体化することで、「文化的景観システム」とも呼べる包括概念を想定し、都市空間の文化的要素をひとつの全体的システムとして捉え、保全していくための議論を展開していくことも

可能になると思われる。

謝辞

本研究を進めるに当たり、雲南省麗江納西族自治县人民政府の知事である和良輝氏以下政府関係者各位、東京大学大学院工学系研究科の大西隆教授・西村幸夫教授・城所哲夫助教授・北沢猛助教授、同大学院農学生命科学研究科博士課程の和愛軍氏には多大なるご指導・ご支援を頂いた。また地域住民の皆さんには快く調査にご協力頂いた。記して感謝の意を表したい(以上所属・役職は2003年3月現在のもの)。

補注

¹ 本中 (1999) の研究はこれを試みている数少ない例であり、麗江を含む、若干の世界遺産都市空間について、「文化的景観」概念の適用可能性について論じている。しかしながら現地調査による実証が行われていないため、UNESCO による条文をどう適用するか、という解釈論にとどまっている。

² 例えば UNESCO PROAP (2000a) (2000b) など。

³ 2002年12月26日、中国国务院は「麗江地区」を「麗江市」とし、同時に「麗江納西族自治县」を廃止する行政区分の改正を決定、2003年4月1日よりこの新区分にて地方行政が執り行われている。これに伴い「麗江地区麗江納西族自治县大研鎮」は「麗江市古城区大研鎮」となった。なお、本稿の記載事項は全て2003年4月以前の調査結果に基づくものであるため、本文中では旧行政区分のままに表記を統一することとした。あらかじめ了承されたい。

⁴ この点については麗江に限っても、UNESCO PROAP (2000a)、UNESCO PROAP (2000b)、Drdácký (2002)、山村 (2000a)、Yamamura (2003a) など複数の研究で指摘がなされている。

⁵ Drdácký (2002)、山村 (2000a)、Yamamura (2003a) を参照。

⁶ 例えば前川 (1998) など。

⁷ 原文では“existential space”。Norberg-Schulz (1973)。

⁸ 雲南省城郷規劃設計研究院 (1997)。なお、UNESCO 側は現地政府に整備を義務付けるのみで、地域個別の保護計画等を策定することはない。

⁹ 大研鎮に関する統計数値は全て大研鎮政府提供の内部資料による。2000年12月提供。

¹⁰ 世界遺産登録の仕組みについては下間 (1997) などを参照。

¹¹ 「世界遺産リストの典型像構築のための世界的戦略と主題別の専門的研究に関する専門家会議」における指摘。

¹² 事例の詳細については本中 (1999) を参照した。

¹³ 世界遺産登録の際には、登録基準に照らし合わせた審査とともに、それぞれの価値の「真正性」(authenticity) についても検討することとされている。

¹⁴ 欧州景観条約における文化的景観の体系をめぐる議論。本中 (1999)、pp.304-305参照。

¹⁵ なお、1990年のデータによればナシ族の総人口は約27万8千人。そのうちの66.5%に当たる19万8千人が麗江ナシ

族自治州に居住する。郭ほか編 (1999)、pp.419-421、雲南省麗江地区行政公署・雲南省麗江地区地方誌弁公室 (1997)、p.60、中国国家统计局綜合司編 (1994)、p.155参照。

¹⁶ 西北シルクロードと並ぶかつての重要な国際交易ルート。東西二道あり、そのうちの西道が四川省成都から麗江を経て雲南省西南部經由でインド等の諸外国と結ばれていた。

¹⁷ かつてチベットと雲南を結んでいた主要交易路。荷馬の商隊が茶葉を運んでいたことからその名が付いた。雲南のプーアルから昆明、大理、麗江を経てチベット、インドと結ばれた。

¹⁸ 現在、現地で入手可能な資料で、ナシ族文化について系統的に整理された有用なものに、郭 (1998)、郭編 (1999) などがある。

¹⁹ 自然崇拜を中心とする原始宗教“トンバ(東巴)教”を基盤とするナシ族の伝統文化。象形文字、祭祀・儀礼形式、自然知識、芸術、習俗などの精神文化として、今日もなおナシ族に受け継がれている。なお“トンバ”とはトンバ教における男性祈祷師を指す。詳細は郭編(1999)参照。

²⁰ 殷周時代の社会と文化を基礎に成立し、その後、戦国から前漢代の儒者たちによって『周礼』や『礼記』などの經典に体系化され、中国固有の国家システムとして歴代の王朝に継承されていった儀礼や祭祀の体系。

²¹ 元から明、清初までの341年間、中央朝廷から世襲知事の官職「土司」を与えられたナシ族首長(王族)の居城。ナシ族政権における政治の中心として機能した。

²² 白沙郷白沙村。大研鎮から約6km。ナシ族の最も古い集落と言われる。壁画、寺廟、白沙細楽(民間音楽)等の文化遺産を有する。大研鎮旧市街地とともに世界文化遺産として登録されている。

²³ 白沙郷龍泉村。大研鎮から約7km。大研鎮旧市街地より古い集落で、ナシ族の最も古い集落の一つであると言われる。伝統的家屋、龍泉寺、田園景観、張り巡らされた水路等の文化資源を有する。大研鎮旧市街地とともに世界文化遺産として登録されている。

²⁴ なお、こうした文化遺産の価値を評価する上での、現行の枠組みの限界性については、世界遺産都市研究の最先端の実務的・学術的議論の場であるOWHC (Organization of World Heritage Cities) においても重視されるようになってきている。2003年の会議においては、「遺産概念を拡大」し「無形遺産」も含め議論する必要があること、「ハード重視」の保存戦略から「ソフト重視」の保存戦略へと移行する必要があること、などがフォーラムの結論として宣言された (Organization of World Heritage Cities 2003)。筆者もこの会議に参加し無形遺産保護に関する口頭発表を行い、宣言に「無形遺産」の文言を入れる上で大きく貢献した (Yamamura 2003b)。こうした UNESCO 関連の国際的議論においても、本研究で指摘しているような事項が重視される潮流にあると言える。

²⁵ 山村 (2000a) (2000b) 参照。

参考文献

張天新・山村高淑 (2003) 「麗江古城の日常生活空間結構解析」北京大学学報 (自然科学版)、第39巻、第4期、2003年7月
中国国家统计局綜合司編 (1994) 『中国民族統計年鑑1949-

- 1994』民族出版社
- Drđácký, M. F. (2002). *Impact and Risks of Tourism in Cultural Heritage Environment*. Conference Proceedings of the Scientific Conference: Preservation, Development and Monitoring of Historic Cities in 21st Century, April 18-20, 2002. Athens: ICOMOS.
- 徐霽 (2000)『雲南図典・麗江』雲南人民出版社
- 郭大烈 (1998)『納西族風情録』四川民俗出版社
- 郭大烈編 (1999)『納西族文化大観』雲南民族出版社
- 郭大烈・和志武 (1999)『納西族史』四川民族出版社
- 郭浄・段玉明・楊福泉編 (1999)『雲南少数民族概覧』雲南人民出版社
- 前川道郎編 (1998)『建築的場所論の研究』中央公論美術出版
- 本中眞 (1999)「文化と自然のはざまにあるもの～世界遺産条約と文化的景観～」奈良国立文化財研究所学報研究論集X, 第58冊, pp.231-318.
- 根本昭,根本修,垣内恵美子,大塚利昭 (1999)『田園の発見とその再生－「環境文化」の創造に向けて－』晃洋書房
- 日本建築学会編 (1996)『建築・都市計画のための空間学事典』井上書院
- Norberg-Schulz, Christian (1971). *Existence, Space and Architecture*. London: Studio Vista. (邦訳: 加藤邦男訳 (1973)『実存・空間・建築』鹿島出版会)
- 於堅 (1998)「幸存之城－麗江大研鎮」, 山茶, 1998年第3期号 (総第95期), 山茶雜誌社, pp.6-21.
- Organization of World Heritage Cities (2003). *ICCROM Mayors & Decision-Makers' Forum Conclusions*. Conclusions declared at 7th International Symposium of the Organization of World Heritage Cities in Rhodes, Greece on 26 September 2003. Rhodes: OWHC.
- 欧之徳 (2000)『麗江四方街』解放军文艺出版社
- 羅亜蒙等編 (1998)『中国歴史文化名城大辞典・下巻』人民日報出版社
- 下間久美子 (1997)「世界遺産条約の運用のしくみ－世界遺産センターでの十三か月を通して」文建協通信, 41号, pp.1-29.
- 蒋高宸 (1996)『麗江－美麗的納西家園』中国建築工業出版社
- 周恩洲・李友枝編著 (1999)『名城訪古』旅游教育出版社
- UNESCO PROAP (2000a). *Action Plan for Lijiang*. A paper for a UNESCO conference/workshop for the enhancement of stakeholder cooperation in tourism development and heritage preservation in Asia and Pacific, Bhaktapur, Nepal, 8-16 April 2000. Bangkok: UNESCO PROAP.
- UNESCO PROAP (2000b). *A heritage protection and tourism development-case study of Lijiang Ancient Town China*. A paper for A UNESCO conference/workshop for the enhancement of stakeholder cooperation in tourism development and heritage preservation in Asia and Pacific, Bhaktapur, Nepal, 8-16 April 2000. Bangkok: UNESCO PROAP.
- 雲南省城郷規劃設計研究院 (1997)『麗江大研古城保護詳細規劃』
- 雲南省城郷規劃設計研究院・麗江県城建局 (1988)『麗江歴史文化名城保護規劃』
- 雲南省麗江地区行政公署・雲南省麗江地区地方誌弁公室 (1997)『麗江年鑑1997年版』雲南科技出版社
- 雲南省設計院 (1986)『雲南民居』中国建築工業出版社
- 和勇 (1998)『麗江旅游指南』雲南人民出版社
- World Heritage Committee (1992). *Official Record: WORLD HERITAGE COMMITTEE Sixteenth Session (Santa Fe, USA, 7-14 December 1992)*. Paris: World Heritage Centre.
- World Heritage Committee (1994). *Official Record: Expert Meeting on the "Global Strategy" and thematic studies for a representative World Heritage List (UNESCO Headquarters, 20-22 June 1994)*. Paris: World Heritage Centre.
- World Heritage Committee (1997a). *Convention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage*. Report of the 21st Session of the Committee. Paris: UNESCO.
- World Heritage Committee (1997b). *Justification for Inscription: The Old Town of Lijiang*. Report of the 21st Session of the Committee, UNESCO (WHC. 97/CONF.208/17). Paris: UNESCO: p.41.
- World Heritage Committee (1999). *Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention*. Clause 24, UNESCO (WHC.99/2, March 1999). Paris: UNESCO.
- 山村高淑 (2000a)「麗江古城における歴史的空間の保存と整備に関する研究」日本建築学会大会学術講演梗概集, 2000年, pp.1055-1056.
- 山村高淑 (2000b)「麗江古城における伝統的住宅建築」日本建築学会比較居住文化小委員会編『第9回比較居住文化小委員会フォーラム資料集－中国少数民族の居住文化と空間の魅力－』日本建築学会, pp.21-33.
- Yamamura, Takayoshi (2003a). Indigenous society and immigrants: tourism and retailing in Lijiang, China, a World Heritage city. *TOURISM: An International Interdisciplinary Journal*, Vol. 51 (2003), No2: pp.215-235.
- Yamamura, Takayoshi (2003b). Succession and Tourism-use of Intangible Cultural Heritage: the Roles of Local Government and Communities in the Old Town of Lijiang, China. A paper for [7th International Symposium of the Organization of World Heritage Cities] in Rhodes, Greece on 23-26 September 2003. Rhodes: OWHC.
- 楊仲禄・張福三 (2000)『麗江古城』雲南美術出版社